

伊野の自然を舞台に子どもの遊びをつくる

1 伊野バージョンとは

島根大学教育学部の学生が組織するグループで、伊野の自然を舞台に子どもの遊びをつくり、遊びを通して子どもの成長を促すことを目的に活動を展開している。

2 発足の経緯

- ① 2012 年秋、島根大学教育学部の山形（1 回生）、青木（2 回生）、日下（1 回生）から、「自然を舞台に子どもの遊びをつくる活動を行いたい」という相談が多久和祥司（伊野地区自治協会会長）にもちかけられた。

山形らが構想を島根大学・作野宏和教授に相談したところ、多久和伊野地区自治協会長を紹介されたこと、さらに日下が多久和の教え子であったことが縁で、伊野地区にやってきた。山形らは伊野地区を見て回り、ここで活動することを決意した。

- ②その後、彼らは伊野地区に溶け込むための活動に努力を惜しまなかった。伊野地区中学3年生の入試対策勉強会の講師を務めたり、伊野コミセンの大掃除に参加するなど、地域に入り込む努力を続けた。彼らの提案で、2013 年3月24日、学生たちと伊野地区住民との交流会が開催され、地区住民30人余が参加した。

- ③3月から学生等は13年度の活動について具体的な検討を開始した。伊野小学校児童と旭丘中学校生徒（伊野地区在住）にアンケートを行い、結果をもとに活動計画案をつくった。

3 2013年度の活動

(1) イベント

①森の中の秘密基地づくり

子どもたちの希望が最も多かった秘密基地づくりを6月16日、野郷町内の森林で行った。竹や木を切り出して檜やぐらを作ったり、すべり台を作ったりして森の生活を満喫した。

②泥んこフェスティバル

8月17日、休耕田を利用して、田んぼ運動会を行った。ヌルヌル・ズルズルの田んぼの中で、リレーや相撲が繰り広げられ、子どもも学生も泥まみれになって大はしゃぎだった。

③大学祭に参加

10月13日、伊野の子どもたちはコスプレして、島根大学学園祭に参加した。伊野小学校児童の3分の2にあたる40名余に加え、保護者等も20名余が参加し、大学祭という非日常空間に浸った。

④伊野ヤサイバル

地域を歩き回り野菜を集めるウォークラリーが2月23日、伊野コミュニティセンターから半径2キロ以内の地域で行われた。各グループが集めた野菜はその後のゲームでぶんどり合戦。ゲットした野菜でカレーや鍋料理作りを楽しんだ。

⑤地元住民との交流会

1年間の活動のふりかえりと慰労という趣旨で、3月21日、学生と地元住民との交流パーティーが開催された。

(2) 日常的活動

伊野地区の小中学生を対象とした「夏休みサマースクール」の講師を務めたり、伊野小学

校宿泊訓練や伊野地区文化祭などに参加するなど、日常的な活動に努めて参加するようにした。

4 2014年度の活動

(1) イベント

①真・海物語2

初めて海を舞台にした活動が6月15日、地合海岸で地元住民の協力を得て展開された。子どもや保護者・学生たちは泳いだり、貝とりをしたりして、海の醍醐味を満喫した。

②泥んこフェスタ

昨年、子ども・学生に人気が高かったので伊野バージョンの定番になりそうな勢いである。今年は綱引きや2人3脚など新しい種目を取り入れて、泥まみれの笑顔をつくりだそうとしている。

③その他

秋・冬企画を行う。内容は未定。

(2) 日常活動

6月29日に開催された伊野地区バレーボール大会に伊野バージョンチームが参加し、存在感をアピールした。今年もサマースクールの講師は伊野バージョンの学生が務めている。

5 これまでの成果と課題

(1) 伊野バージョンは子どもの楽しみ

①子どもたちは伊野バージョンを楽しみにしている。参加率は非常に高い。保護者も楽しみにしている。

②子どもと自然との関係、子どもの自然認識、子どもと子どもの関係等がどのように変化したのかについては詳細な検証が必要である。

(2) 地域にもたらした変化

①「伊野バージョン」という言葉は、地域に定着し、協力を惜しまない雰囲気醸成された。また、伊野バージョンに触発され、地域のために何かをしたいという流れが生まれた。

②伊野バージョンに参加したいという他地域からの声が聞かれるようになったり、マスコミ報道に触れた人から「伊野はすごいね」などという反応が返ってきたりして、地元住民も伊野の魅力を再発見している。

(3) 学生にとって

①地域は様々な人や組織によって、暮らしが成り立っている。そこに入り込む困難や喜びを体感したことは、これからの教師に求められる力量形成に大きな影響を与えると思われる。

②伊野バージョンが一過性のものに終わらないために、創業者世代から次世代へのバトンタッチをどのように進めるかは重要な課題である。

③地域にとって学校とは何か、子どもの成長を後押しするために地域社会はどのような役割を果たすのか。人口減少社会が直面する今日的課題について問題関心を強めてほしい。

④「何ができるかではなく、何をしたいかを考え続けたい」と言う山形らの「創造性」と「先駆性」は伊野地区に新鮮な共感を呼んでいる。日本の政治課題の1つは若者たちの社会参加である。こうした観点からも伊野バージョンの意味を考えてみたい。